

2012年度立命館大学国際言語文化研究所 冬季企画Ⅲ

国際ワークショップ

トラベルライティングという領域

トラベルライティング、すなわち紀行文や旅行記、道中記、現地報告書や公的旅行記録などは文学者だけではなく、一般の人々にも広く開かれた言説ジャンルであるにかかわらず、小説や随筆などの文学からは一段低いもののように思われてきました。本ワークショップでは多くの読者、そして書き手が築き上げてきたこのジャンルを二つの側面からアプローチをしていこうと思います。一つは日本人の主に近代以降の海外紀行文、あるいは文学者や思想家、啓蒙家の海外旅行記を読んで、そこに現出する問題を指摘すること、二つめには非日本人がみた日本を描くテキストを分析することです。このような双方向的な探索によってトラベルライティングの持つ様々な側面を考えていきたいと思ひます。

発題：木村朗子（津田塾大学）
マイケル・クロニン（ウイリアム&メリー大学）
温又柔（作家）
黒岩裕市（フェリス女学院大学）
久保田裕子（福岡教育大学）
エマヌエラ・コスタ（立命館大学）
陳捷（国文学研究資料館）

コメント：クリストフ・ソニー（東京大学）
デュニ・テランディエ（立命館大学）

司 会：中川成美（立命館大学）

第1日：2013年3月26日（火）14:00-17:30

第2日：2013年3月27日（水）13:00-16:00

参加無料
事前申込不要

場所：立命館大学 衣笠キャンパス 末川記念会館 第3会議室

＜国際ワークショップ「トラベルライティングという領域」の開催にあたって＞

トラベルライティング、すなわち紀行文や旅行記というジャンルは従来文学や詩、随筆などとは違ったセクションに置かれ、なかなかその概要を説明したり、構造を理論化するということは非常に少なかったように思います。しかし、その膨大な堆積を見ていくと、人間が異郷や外国に赴いた時の「書く情熱」、「表現する欲望」はなみなみならないものであったように感じられます。特に近代以降の近代科学技術の発達に伴って現出したツーリズムは、人間のこうした欲望を下敷きに大きく膨らんでいったのは言うまでもありません。

今回特に日本人が19世紀半ばに突如として開かれた海外への視線と、身体の体験は、日本人のメンタリティにどのような影響を与えたのか、また「発見」された日本の文化はどのような位相のもとに理解されていったのかなどという問題項を立て、異質な文化や社会に出会うことによって気づく「差異」の違和感が、どのような表象をもたらしていったかを考えてみます。単純に旅行記を読んでその足跡をたどるというようなことではなく、そこに横たわる基本的な思惟の形式について、基本的な理論構築につながることを目標とします。

一回目に当たる本ワークショップでは具体的に二つの側面からアプローチをします。

1) 日本人の主に近代以降(明治から現代まで)の海外紀行文、あるいは文学者や思想家、啓蒙家の海外旅行記を読んで、そこに現出する問題を指摘する。

2) 非日本人がみた日本、これも主に明治以降の近代に時代を定めて詳細にそのテキストを分析する。

以上の双方向的な探索によってトラベルライティングというジャンルの持つ様々な側面を考えていきたいと思います。みなさまの積極的なご参加を期する次第です。